
空に、はな咲く

りい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空に、はな咲く

【Nコード】

N6988W

【作者名】

りい

【あらすじ】

なんてキレイな手だろう。キレイな、ていうのはもちろん、職人さんの手として、って言う意味。

その手が好きだなあと、思わずほれほれしてしまう。

1話

この夏、我が家はちよつとだけ、変貌を遂げようとしている。
お兄ちゃんが車を買うことになったからだ。もちろん、中古だけ
ど。

これまで車というものがなかった我が家にとっては初のマイカー
だ。今時珍しいって思うんだけど、お父さんもお母さんも免許は持
ってない。当然ガレージなんてものもなかった。

そういうわけで。今。庭の一部を削って急遽作成中ってわけ。

「^{はしき}葉月ー！ これ、差し入れしてきて〜！」
「はあい」

夏休みで家にいるからって、お母さんの人使いが荒いこと荒いこ
と。いつもなら拒否するところだけど、最近のあたしは違う。

ベッドの上で寝そべっていた体を起こし、読んでいた漫画を置く。
鏡でささつと髪をチェック。うん。どこもヘンなところはないよね？
顔、テカってないよね？ 服は……よし、オッケー！ サンドル
を履いて玄関のドアを開けた。

うへー、暑い。うんざり顔は一瞬で無理矢理引っ込め、一番いい
顔を作って庭に向かう。

「これ、母からでーす」

三時になるといちいちこうしてお茶とお茶菓子を出している。よ
く分かんないけど、あたしの分まで買ってきてくれるので、あたし
的にはラッキー。今日は水ようかんか……。うーん。どうせならシュ
ークリームとかがよかったな。

職人さん達が一斉にこつちを向く。そのなかの一人が軍手を外し
て、あたしに近寄って来た。

「いつもありがとう。いただきます」

トレイを受け取るうとする手が目に入る。

どくん、と心臓が飛び跳ねた。

なんてキレイな手だろう。

キレイな、ていうのはもちろん、職人さんの手として、って言う意味。

その手が好きだなあと思わずほれぼれしてしまう。じつと見てしまふ。こういう人、今まであたしの周りにはいなかったんだもん。

「ヒロも休め」

この中で一番年配の——みんなから親方って呼ばれてるから、一番偉い人なんだと思う——人が、今あたしからトレイを受け取った人にそう言葉を掛ける。

つい一週間前にうちに入入りするようになった、表も裏も真っ黒の『ヒロ』さん。は、どうやら一番下っ端らしい。オジサンばっかのこの中でダントツに若い。

ヒロさんはお茶とお茶菓子を配り終えてからしか休憩に入れないらしい。

そのことに気がついたのは、庭の工事が始まって三日目のことだった。暑いし、疲れてるのは他の人と同じなのに、その分休憩時間も短くなっちゃうし、だからあたしが配りますって四日目の日にそう言った。

「ありがとう。でも、これもオレの仕事なんだ。だからお嬢さんは気にしないで」

お嬢さん。

浅黒い顔から白い歯を零して、ヒロさんはあたしのことを『お嬢さん』と言った。

お嬢さん、だって。

言われ慣れないことを言われて、すぐドキドキして。照れる代わりに思わず噴き出してしまった。

「や、やあだー！ お嬢さんてガラじゃないよ。葉月でいいってば」「あはは。でもそう呼べって親方から言われてるんだよねー」

浅黒い顔で笑うと白い歯が際立つ。当たり前だけど仕事中には絶対に見れない表情だ。その他でも親方さんと話すときはすごく真剣な顔してるし。お父さんやお母さん相手の時はもつとだ。

つまり、この笑顔はあたしが話しかけないと見られない。……と言いたいところだけど。お兄ちゃんと話すときはもつと楽しそうなんだよね。

なんて言うか……ギャップ萌え？ すっかりやられてしまったってわけだ。

それで夏休みだというのにこうしてヒロさん会いたさに家にいる毎日が続いている。

家の外とはいえ他人が毎日いることが、正直言つて最初はすごく嫌だった。こういうことに使われたり、外出するたび挨拶とかも、面倒だなんて思ったりもしたあたしが。

ええ、現金で結構。恋は女を変えるのよ！

「お嬢さんはどこも出かけないの？」

今ではあたしを呼ぶ『お嬢さん』って意外は、すっかりタメ口。そういうあたしもだけど。

ようやく腰をおろして、グラスの氷がすっかり小さくなってしまったお茶を一口飲んであたしに聞いてきた。

「うーん。暑くてねえ」

「へえ？ オレがお嬢さんくらいときは、休みの日なんか家にいなかったけどなあ」

「あ、分かった。デートで忙しかったんでしょ？」

さりげなく探りを入れてみる。

みんなから『ヒロさん』って呼ばれてるってこと以外知らないんだもん。

名字は？ 年は？

うつん、そんなことより——彼女はいるのかな？

この流れで次はそう聞き出そうとしたあたしの思惑を知ってか知

らずか、ヒロさんは。

「あははは。じゃあそういう事にしておいて」
軽く流してくれちゃったのだった。

び、微妙。『じゃあ』ってなんだっ。どう取ればいいのか悩むような返事しないですよ！。

大人だ。やっぱり学校の男子とは違うな。

そうだなあ。ヒロさんがいくつかは知らないけど、こっちは高2。まだ16歳だ。しっかり働いているヒロさんから見たら、あたしはめちゃくちゃ子どもに見えるだろうなあ。

会う場所が家って言うのがそもそも問題だと思う。

夏だし。家中のいろんな窓が開いてる。

なのにお母さんでは何回も止めてって言ったのに、『宿題やったのか』とか『少しは手伝え』とか大きな声で言うんだもん。あれ、絶対聞こえてるよ。恥ずかしい。

……あたしが言われないようにすればいいんだろうけど。それは分かってるんだけどさ。

だって。暑いんだもん！

「あー、うまかった。ごちそうさま」

え、もう？ ヒロさんはお菓子もお茶もほとんど流し込むように口に入れると、ほんのちよつと外にいたってだけでもクラクラしそうな暑さの中に戻っていった。

強い日差しを浴びて、汗で光る肩を後ろから眺めて思った。明日はヒロさんのお茶はみんなとは別に入れてあげよう。キンキンに冷えたやつ。飲ませてあげたいから。

「葉月。なにアンタ。さっきからため息ばかり！」

「ああ、ごめーん。雨だなあって思ってた」

「そういえば台風が近づいて来てるって天気予報で言ってたっけね」

「」

向かいに座る、雅が呑気な声を出した。

「え？　じゃあ明日も……？　ええ、そんなああ！」

「あ、まあ。なに葉月。さてはオトコだな？」

あれ？　あたしまたため息ついた？

カンのいい雅が、さっそく食いついてきた。

ヒロさんがうちに来る日はずっと家にいた。何回か遊びの誘いはあったけど、適当にごまかして断ってた。だから今日は久しぶりに学校の友達とランチしにファミレスに来ている。

なのにイマイチテンションは上がらない。だって、ヒロさんに会えないんだもん。

昨日はあんなにいい天気だったのに。今日は朝から雨。雨ってことは、工事はお休みだ。それはつまり、ヒロさんにも会えないってことに繋がる。なのに明日も？　ため息もでるよ。

半分残ったアイスティーのグラスをストローでかき回しつつ思い浮かべるのはヒロさんの笑顔。そしてあの手。今何してるのかな。どこにいるのかな。急に出来たお休み。誰かと一緒だったり、しちやってるのかな。

かなり小さくなった氷は、グラスの中で小さくチャリチャリって音を立てて踊っていた。

「ふうん。いいじゃんいいじゃん！」

ヒロさんの話をすると、雅と、雅の隣に座る雅の彼氏、啓太けいたまでもが身を乗り出してきた。

「どうりでねー。最近メールが来ないと思ってたんだー。いつもな

ら『つまんなーい。どっかいこー』ってすぐ寄越すのに」

「へへ。ごめん。なんか、だってもう……時間、ないし」

「うんうん。いーよいよ。頑張れよー」

あたしが前の恋をちよっぴり引きずってたことを知ってる雅は、嬉しそうに励ましてくれた。

四月に大学生となった二つ先輩の彼……いや、元彼は、離れて一ヶ月もしないうちにあたしのもとを去っていった。

同じサークルに彼女が出来たから、一方的に別れようって言ってあれから三ヶ月。もう忘れてもいい頃だと、自分でも思う。ううん。忘れなくちゃって思う。そう思いながら出来なかったことは、夏が連れてきたヒロさんというひとりの男の人の存在が吹き飛ばしてくれた。

そのヒロさんとはガレージが出来たら会えなくなってしまう。雨が降ればその日は遠くなるけれど、こうして会えないなら同じことだ。

ぶんぶんと、思い切り頭を振った。

そうだ。もうそんなに時間がない。ヒロさんとは、うちの工事中になんとかしないと。それで終わりだ。

蝉がミンミン鳴いてる。台風はかろうじて直撃することではなくて、わずかにそれで海上へ抜けて行ってくれた。

一応台風が来るからと、この前の帰りしなに工事中の箇所はシートできちんと覆ってくれてはいたけれど、台風の雨風で庭はタイヘンなことになっていた。

流れてきた泥。たくさん草や木の葉っぱ。どこから飛んできたのか、スーパ一の袋。ペットボトルまである。

これじゃあ作業に入る前に掃除から始まることになっちゃうかな。そういうのもやっぱり、ヒロさんの役目になっちゃう？

いつも仕事と言いながら、雑用ばかり押し付けられてるヒロさん

の姿を思い出して、せめて少し掃除しておこうと箒を手を取った。

あー、暑い。こんなことしたの初めてかも。ヒロさんはもちろんだけど、お母さんも大変だったんだな。庭掃除のあとは必ず腰がいたいって言ってたもんね。ちよつと反省。これからはもう少し家の手伝いしてあげよう。ちよつとだけだ。

芝やシートの上に落ちた葉を掻き集めたところで、後ろから声がした。

「あれっ、お嬢さん？」

「うつわ、びつくりした。ヒロさん……早いね」

「うん。作業の前に掃除しなくちゃって思ってたさ」

「えへへー。そうだと思って、掃除しといたよ。あと塵取でコレ捨てるだけ」

「えっ。わ、ほんとだ。ありがとう」

「やだなあ。自分ち掃除してお礼言われることないんだけど」

「あ、そっか。あはは。でもこういうのも当たり前ー、みたいな家多いからさ。だから嬉しいよ。ありがとね」

ちよこんと、ヒロさんの手が頭に乗った。

胸がきゅうつと熱くなる。

にこにこ笑うヒロさんに、今しかないって思った。あともうちよつとしたら他の人もやってくるだろう。そしたらこんなこと言えなくなっちゃうから。

震えそうになる声を必死に抑えた。

「あのね。お礼ならあたし、他のことがいいな」

「え？」

「花火大会に行きたいなー、なんて」

来週の日曜日の花火大会。工事はその前に終わる予定だった。家にいることが多かったおかげで宿題もかなり捗った。

だから。もしも……もしも……だったら。残りの夏休みはヒロさ

んと一緒に過ごしたい。ヒロさんはあたしと違って、仕事で忙しいだろうけど。暇な時間でいいから、あたしと会って欲しい。

なのに。

ヒロさんのビックリした顔に濃い影が落ちる。太陽が雲に隠れてしまったらしい。暗い表情に見えるのはそのせいだけじゃない。その後すぐに困った顔をして「でもお客さまだからなあ……」って、そう言った。

蝉の声が一瞬止んだ。

その日から家にいるのを止めた。

正しくは。雅んちに転がり込んだ。

「ねえ、そろそろ帰ったら？ おばさんから何度も電話来てるしさ」

「いーのっ！ 工事終わるまで帰らない！」

「そりゃ、気持ちは分かるけどさあ……」

だって、あんな言い方ってないって思わない？ 断るにしたって、

言い方ってもんがあるじゃん！

それにさ……。

「ヒロさん、絶対仕事しずらくなっただって思ってるよ。あたしがいなくてほっとしてるよきつと」

「葉月さあ。元彼るときもそうじゃん？ あっさり諦めるじゃん？

あたしはさ、アイツあんまり好きじゃなかったから、別れたって聞いたときホッとしたけどさ。ヒロさんて人、葉月の話し聞く限りじゃ、いい人そうじゃん」

「雅……」

「このままじゃ、ほんとにもう会えなくなっちゃうんだよ？」

「そんなの……分かってるよ……」

そう。元彼のことだけじゃない。あたしはいつもそうだ。少し手を伸ばせば届きそうなものでも、ちよつと大変そうだと途中でも何

でも諦めてしまう。

ヒロさんは違う。

じっとしてたって汗が出る。うだるような暑い中での作業。額も首筋も、背中も。うちに来て30分と立たないうちに汗で光りだす。真っ黒に日焼けしてるのは一生懸命働いてる証。

節くれだつた指は白くて。それは作業中ずっと軍手をしてるから、そこだけ焼けてないから。

見てたから知ってる。こんな大変な仕事、あたしならたぶん、一日だって持たない。

ヒロさんの気を引きたくて手を出そうとすると、『オレの仕事だから』って。そう言っ。でも必ず『ありがとう』って笑顔をくれた。

あたしは、その笑顔を好きになつたんじゃないかな？

でもあたし、結局告って無い。ああ言われて、逃げただけだ。もう会えないなら、ちゃんと言わなくちゃ。

ケータイや手帳、広げていた宿題を掴んでバックに押し込む。

「ごめん、雅。あたし帰るっ！」

急いで立ち上がると、後ろから雅の声が聞こえた。『がんばれ』って。

いつも入念にチェックしてヒロさんの前に出たのにな。夕方とはいえ、真夏のアスファルトはまだまだ熱を帯びたまま。どこかの家が打ち水をしたみたいで、そこから水蒸気が立ち上っていた。

雅の家からずっと走ってきたせいで息は上がってる。髪の毛はぼさぼさ。顔はきつと汗でつかてかだろう。

そんな状態で家に辿り着いたけど。

時、すでに遅し。

この前までここは、キレイな緑色の芝が一面敷き詰められていた。

何本かの木とお母さんが丹精こめて育ててた花が植わっていたハズだった。

掘削工事が始まったとき、それをほんとに大事そうに移植してくれたっけ。

そして基礎工事をして、支柱を立てて、屋根を取り付けてた辺りまでは覚えてる。

それが今はもうコンクリートも流されて、それももうすっかり乾いていた。

削った芝も植栽も。違和感なく戻されてた。

立派なガレージが出来上がっていた。

2話

いつもは静かな町も、花火大会のこの日は一挙に人口が増える。打ち上げ開始時刻は夕方の六時半からだというのに、朝からすごい人で溢れかえっている。遠くからも来るので駅はパンク状態。歩道にはずらりと並ぶ出店。ビールやおつまみや、シートを抱えて打ち上げ会場の河川敷へと列をなす人、人、人。自転車さえ通るのもやっとなほだ。

見に来る人たちだけじゃない。街中の人もどことなく浮き足立っている。お母さんも近所の人と、いそいそ夕ご飯の支度をしていた。毎年一緒に見ている近所のおばさんだ。

日本人ってほんとお祭り好き。そういうあたしも例外ではなかったんだけど。――去年までは。

ドン！ ド、ドン。

昼花火が聞こえた。よく運動会とかで打ち上げられる、音だけの花火だ。これを聞くといつもわくわくしてた。あー、夏だな。夏が来たなっと思う。

けど今は……。

手足を投げ出し、床の上に寝そべった。

あーあ。どうしたもんかなあ。

帰ってきてから、あたしはすっかり挙動不審人物に成り下がっていた。

毎日毎日、ヒロさんに会えないかと工務店の周りをうろうろうろしてゐるからだ。

うちの工事が終われば、また他のどこかで同じようなことしてるんだって気がついたのは、三日通いつめてのこと。それで思い切って電話をかけてみたんだけど……ダメだった。

電話は繋がったよ、もちろん。でもね。それ以前に知らないんだ

もん、あたし。電話口に呼び出してもらう名前すら、あたしは知らないままだったから。

「えと……。いえ、やっぱりいいです。ごめんなさい」

名前は名乗ったものの、それ以上は何も喋れなくて。結局はただの怪しい電話となってしまった。

切ってしまった電話が、残された短い時間を自ら放り出したことと重なる。

なーんか、一気に静かになっちゃったわね。とはお母さんのセリフだ。あたしもそう思う。この前まで――あたしが逃げ出す前までこの家はとても賑やかだった。作業の音が家の中にまで響いてた。そんななかで誰よりもみんなから名前を呼ばれていたのが、ヒロさん。呼ばれるたびに大きく短く応えていた声が、今でもはつきり耳に残っている。お嬢さんって、あたしを呼ぶ声も。

ごろりと寝返りを打つと、すっかり綺麗になった庭が目飛び込んでくる。

風船葛、立葵、ブルースター、ペチュニア、ポーチュラカ。

お母さんが丹念に世話してる庭の花は、移植されても元氣だ。夏の光をいっぱいに浴びている。

色とりどりに咲く花の真上に、青く、青く広がる空。さつき打ち上げられた花火の煙が、一刻も早くと急いでるように、その青い空と混じろうとするように見えた。雲の白とはちよつと違う、ちよつと濁った白色が。

上空は結構風が吹いているのかな。花火大会としては最高のコンディションだ。

ぼんやりとそれらを眺めつつ。なんとかもう一度ヒロさんに会えないかなあって思ってた。

あたしにもう、打つ手はないのかな。なんにもしないまま、ほんとにこれで終わりなのかなあ。

でもそれも自業自得かあ。

空が茜色に染まってくると、ますます人通りが多くなってきたらしい。塀の外をたくさんの人が通っていく気配がする。あと少しで花火が打ち上がる。急がなくても広いからどこからでもよく見えるけれど、なんとなく足が早くなっちゃうんだろうな。気持ちは分かる。

小さくなったポーチウラカに目を留めた。一日でしぼんでしまう花は、花火みたいだ。ぱっと咲き散らし、人の目を楽しませたと思うとすぐにしぼむ。

あたしの気持ちと一緒に……。『あつさり諦めるよね』雅の言葉はあれからずっと胸に突き刺さったまま。取れずに痛い。

のろりと腰を上げて、庭に出た。しぼんで咲き終わった花をひとつひとつ摘まんで取ると、自分で自分の恋心もいっしょに摘んだみたいでますます痛みは増した。

うつわ。ヤバっ。やっちゃった。今、ブチッって音したー！無心で繰り返しているうちに、力を入れすぎて新しい芽までぶっちぎってしまった。

「あらー、ありがとう」

そんな声が家の中から小さく聞こえた。お母さんだ。

あれ？ 怒んないの？

見えてないはずないよね。今さっき力づくでちぎった新芽はまだ手の中だ。

「まー、珍しい。何にも言わなくてもお手伝いしてくれるなんてどうしたの」

「別に。たまたまだよ。っていうか、ひとこと余計なんだけど」

「だって本当のことじゃない」

お母さんはプランターを抱えて庭に出てきた。それを日当たりのいいところに置くと、せっかく元気に伸びている茎をわざわざ花鋏でカットし始めた。それもあたしが今ちぎったみたいな新しい芽ば

かり選んでは、少し離れた場所に植えている。

「こうするとまた咲いてくれるのよねー」

「え？ そうなの？」

「やだアンタ。知らずにやってたの？」

「えー。うん。花が枯れてるなあって思ってたたら、他のまで切っちゃった」

「まったくアンタって子は……」

花は好きだけど、見てるのが好きってだけだから、詳しくはない。こうして庭にたくさん、常に何かの花が咲いているから、名前くらいは知ってるけどね。

でも——終わったように見えてても、終わってないんだ。植物って。命って。スゴイ。

あたし、こんな小さな花に負けちゃダメじゃん。ねえ？

ようし。もう一度行ってみよう！

こうなると居てもたっても居られなくなるのが、あたし。

どこ行けばいいのかは、分かんない。探すあてもない。居そうな場所すら、分かんない。だけどじつとしてられなかった。

「そういえば、葉月がよく話しかけてたあの若い職人さん……なんて言っただけ？」

あたしが突然立ち上がったって、お母さんはお花から目を離さない。まだ弄ってる。

ていうか。名前も覚えてないのか、お母さんってば。あんなに毎日来ていた人なのに。

あー、でもそれもそうか。だってあたしもヒロさん以外の人はよく覚えてないもん。

「……ヒロさんだよっ」

「ああ、そうそう。あの人もね、毎日咲き終わったお花摘んでくれてたのよね」

「そういえばそうだったね」

「やっぱりこういうお仕事してるからかしら。若い男の子が花とかも詳しくて、びっくりしちゃったわ」

花好きのお母さんはそれだけで嬉しそうだった。お兄ちゃんはあるまりというか、全く興味ないもんね。

だけど早く切り上げたくて、気のない返事をした。

「ふうん。そうなんだ」

「これなんか見てみてよ。わざわざプランターに挿し芽にして持ってきてくれたのよ？」

さっきのプランターにはいくつかの小さな芽が根付いていた。けど、それが何？ 今言わなくちゃいけないこと？ 段タイライラしてきたあたしは、すごいトゲトゲした口調で。顔で。お母さんに向かっていた。

「へえ。——え？」

ん？ ……持ってきた？ 誰が？ って、ヒロさんの話してたんだから……来たのはヒロさん。だよな？

「いつっ？」

「今さっきよ」

「じゃあ、さっきの『ありがとう』はっ」

「え？ だから、コレ持ってきてくれたから」

……ええとー。

ちよっと待ってよ？ うん。そうだ。ここは、冷静に考えよう。コレ。ポーチュラカ。挿して、持ってきてくれた。プランター。持って。持ってきて、くれた。——から？

ありがとう。って。ありがとうって——。

アレ、あたしに言ったんじゃない、なかったのか……。
てことは。

うそっ！

「で、ヒロさんはっ？」

なんでそれを早く言ってくれないのー！

でも今すぐ追いかければ、捕まえられるかもしれないよね？
こんなことしてらんないよ。急がなきゃ！

頭の中で何かが弾ける。とびっきりのでかいやつが。

「ねえ、お母さんってばっ。早く！ 早く教えてよ」

「な、なによ。そこにいるでしょ」

は？ そこって――

「こんにちわ、お嬢さん」

う、そ。ほんとだ。振り返るとほんとにそこにヒロさんがいた。
うちのダイニングテーブルに座って、お茶を飲んでいる。

あんなに会いたいつて願っていたのに、あたしときたら。

「あ。は、はあ」

「久しぶりだね。元気だった？」

「は。あ、はい、全く。このとおり……はいっ」

ビックリしすぎてこんな間抜けな返事しかできない。

でもほんとに、久しぶり。

って、それ、あたしのせいなんだけど。

それよりも、もう二度と会えないって思ってた人がすぐそこにいる。
しかも優しく微笑まれてしまった。フラれた相手に、優しくな
顔で久しぶりって。

言われるあたしもあたしだけど。それだけやっぱりヒロさんがオ
トナってことなのかな。

それとも……ひ、皮肉じゃ、ないよね？ そうであって欲しい。

ううん。それでもいい。どうでもいい。会いたかったよ。ヒロさ
ーんっ。

3話

作業着じゃないんだ……。

今日のヒロさんは私服だった。昼間見た空に負けないくらいの鮮やかなブルーのタンクトップを着ている。落ちかけた夕陽が、ヒロさんの褐色の肌を茜色に染めていた。

もう少し暗くなったら見失ってしまうかもしれない。そしたら今度こそ本当の本当に、二度と会えない。

分かってはいるんだけど、並んで歩けるほどあたしの心臓は頑丈に出来てない。

「あ、そうそう。せっかくだから花火大会に行ってきたら？」

再会の喜びはほんの一瞬で、すぐに妙な沈黙がリビングに流れた。お母さんはにこにこしながらヒロさんを見てるし、そのヒロさんはじつとあたしを見てるし。

いたたまれなかった。何を話せばいいのかわかんなかった。

そこになんの気を使ったのか。イキナリオ母さんがあたしとヒロさんにそう言い出したもんだから、もつとだった。

たぶん。ううん、ぜったいお母さんにはあたしの気持ちはバレてるな。

だからそう言ってくれたんだと思う。

でもあの。悪いけど、余計なお世話というかなんと言つか。だってあたし、もう断られてるんだよ？ その傷はまだ癒えてないし、ていうか、絶賛流血中だし、それにヒロさんだって困るよね？

あの時のヒロさんの顔をあたしは今でも忘れてない。あんな風に困った顔をまたされちゃったら、立ち直るのにもつと時間がかかったちゃう。

だからうつんって言おうとしたのに。お母さんたら。

「葉月ったら毎年お友達と見に行ってるのに、今年は朝からゴロゴ

口してばかりなのよ。邪魔だからヒロさんさえよかつたらこの子連れ出してくれないかしら？」

「——じゃあ、はい。行こうか、お嬢さん」

お母さんの大ブッシュで、あたしとヒロさんは今、打ち上げ会場の河川敷に向かって歩いている。

「急がないと始まっちゃうよ」

ヒロさんが振り返って優しく微笑んだ。

打ち上げまであともう少し。この細い道を登りきれば河川敷に出る。交通規制された道は、横幅いっぱい使っても足りないほどの人で溢れていた。

足取りが重いあたしは、どんどん抜かされていく。

「あ、うん……」

「なーんか。元気ないね？」

「そ、う？」

「うん。どっか具合悪い？　アイス食い過ぎて腹が痛いとか？」

「今日はまだ食べてないもん」

「まだいつこしか、だろ？」

「な、なんでっ？」

答えに詰まっていると、顔をのぞき込まれた。「あ、凶星だった？」

間の悪いことに、あたしたちの横をかき氷を持った男の子が通っていた。それを見てヒロさんは。にいつと白い歯を見せた。

「あとで買ってあげるから。早く行こう」

こう言うのって。残酷だ。

本当はもう一度会えたら、きちんと告白しようって思ってた。なのにそんな気は失せてしまった。

川までうちから歩いて十五分。どうってことない距離だけど、この重たい空気が時間の流れを倍以上に感じさせる。

こんな風に歩いてるのはあたしただけだ。年に一度しかない花

火大会を楽しみに来てるんだもんね。笑顔に決まってるよ。なのにあたしときたら。さつきからニコリとも笑わないし、知らない人が見たらケンカかなにかしたのかと思うに違いない。

断ればよかったな。なんか、トドメを刺された気がする。

だってお母さんにああ言われちゃったら、ヒロさんは断りようがないよね。仕方がないなって、きつと思ってるよね。

一度フラれてるのに、今更花火なんて——しかもお母さんに言われて、だなんて。この展開はちよつとキツイ。

でも……ヒロさんも同じだよ。

仕事で来てたんだよ、ヒロさんは。話をしてくれてたのも、楽しそうにしてくれてたのも、全部お仕事のうち。あたしが仕事先の家の娘だったから。

それがはつきりと分かった。

勘違いしちゃったあたしがバカなんだ。

視界が急に開けた。河川敷には何千人？ 何万人？ それくらいの人々が芝の上に座り、空を見上げ、花火が上がるのを今か今かと待っていた。

そのたくさんの笑顔の中に、春に別れた元カレのものを見つけてしまった。隣にいる女の人々が時々肩に触れたり、膝の上に手を置いたりしている。たぶん言っていたサークルの人だよ。すごい、大人っぽい……な。かなり暗くなってきたからよく見えないけれど、きつと嬉しそうな顔してるんだろうな。

自分との違いに愕然とする。

——惨めだ。

「座って見た方がラクだよな。あー、だからみんなレジャーシート持ってきてたのか。ま、しょうがないな。どのへんに座ろうか？」

「ごめん。ヒロさん。やっぱやめよう？」

「え？」

「行こうって言うてくれて嬉しかった。でももういいよ、ヒロさん。

あたしとじゃイヤでしょ？」

「イヤなんてオレ、ひと言も言っていないけど」

「いいのいいの。もうそういうのナシナシ。せつかく連れてきてくれたのにごめんね。ありがとう。でもうん。やっぱり……帰るね」

なんていうか、ごめんなさい。これ以上は無理みたい。最後の力を振り絞って、ヒロさんに笑ってみせた。

「じゃあね、ヒロさん。元気でね。バイバイ——」

あっさりでもなんでも。どうとでも言って。あたしはあたしなりに、今回、かなり頑張った。

「ここまで来てほんとに見ないの？ 行きたいって言ってたじゃん」
頭を下げて、来た道を戻ろうとしたあたしに、ヒロさんの声が追いかけてくる。

何度も、言わせないでよ……。優しくしないでよ……。

そう言いたいのに。声にならない。

だってあたし。まだヒロさんが好きだ。

優しくされて嬉しくないわけない。

一緒に笑って。並んで歩いて。こういうの、夢に見るほどしたかった。

花火大会なんて。お礼にだなんて。そんなの口実に決まってるじゃない。ヒロさんに会えるんなら、うちだろうが、公園だろうが、駅のホームだろうが、それこそ、今のこの場所であってよかった。

どこだって、よかったんだよ。

だからイヤ。ここにいたくない。一緒に居るのが、辛い。もういいっていうのはそういう意味。

じゃあねって、元気でねって、さっきだってどれだけのパワー使ってたかなんて。ヒロさんには、分かんないでしょ？

こんなことならお母さんに言われた時点で、行かないって言えばよかった。そしたら傷が大きくなることはなかったのに。

それとも花火大会に行きたいなんて言わなきゃよかったのかな。
楽しい思い出で終われたよね。

うつん。最初からヒロさんに会わなければよかった——？

すきになることもなかったよ、ね……？

あたし……ヒロさんのこと、すきにならなければ、よかった……
の、か、な？

そんなことを思った途端、目の奥が痛いくらい熱くなった。

「……お嬢さん？」

黙ったままのあたしにヒロさんの優しい目が覗き込む。

だめ。こんなところで泣いちゃだめ。ますますウザイって思われ
ちゃう。奥歯を噛みしめ、何度も頷いた。見ないと言うより絶対見
れないよ。ヒロさんの視線からも逃れるためにも、大きく首を縦に
動かした。

「あ！ またお嬢さんって言っちゃった」

「……え？」

重苦しい雰囲気突然の素っ頓狂な声。や、重くしてるのはあた
しだけ。顔を上げると、ヒロさんは悔しそうに小さく舌を出して
いた。

「なーんか。癖になっちゃって。でももうお客さんじゃなくなった
しね」

え？

「仕事終わったら。『お客さんちのお嬢さん』じゃなくなったら。
オレから誘おうと思ってたんだよ。なのに先越されちゃうし、さっ
きつからそっけないし。カッコつかないじゃんオレー」

わしわしと。あのキレイな手が、ヒロさんの短い髪を豪快に掻き
上げている。

「え？」

目の際に溜まってたものが引っ込むくらい、頭の中が『え？』で
いっぱい。

どういうこと？ オレからって？ 先越されたって？ え？ え？
なに？ 全然分かんない。

「言わなかったっけ？ その辺のところはきっちり線引かないと、
まだ見習いのオレなんか即刻クビだよ」

「う、うそ」

「うそじゃないって。毎日毎日、親方に釘刺されてたんだぜー」
うそうそ。……うそだあああ。

「え。じ、じゃあ……ヒロさんは、あたしのこと……」
「うん？」

まさかと思うマイナスの気持ちと、もしかしたらと思ってしまう
プラスの気持ち。それらが相殺してしまい、舌先の上でぐるぐる周
り、言葉に出てきてくれない。

だって、やっぱり怖い。

躊躇していると――

ヒュルル……小学生がソプラノリコーダーの練習をしてるみたい
な、頼りなげな音がした。聞こえてきた歓声に思わず振り返る。

藍色の空に白い光は天高く伸びていく。一瞬の間の後。ドン！
と、お腹の底にずしりと響く轟音と共に、ぱあっと辺りを照らした。

一発目を皮切りに、矢継ぎ早に大きな爆発音が耳をつんざく。空
に瞬く咲く、大輪の花。散ったと同時に次々と開く。赤、黄、紫、
緑――。色を変えて、形を変えて、真つ黒な空を明るく染める。

拍手がわき起こった。光の粒が雨のように落ちてくる。火薬がパ
チパチ弾ける音が聞こえてくる。思わず見惚れていると、こめかみ
に柔かいものが触れた。

え？

見上げると、ヒロさんが何かを言ってた。

「え？」

聞き返すと、ふっと笑って耳元に顔を近づけて来た。

聞こえてきたのは――

「すきだよ」

って。一言。

花火の音と歓声で煩かったけど。確かにそう聞こえた。

もう一度、信じられない気持ちでヒロさんの顔を見直してみると、ヒロさんの顔は、花火の色なのか、それとも照れてるのか、ちよつと赤い。それでもあたしのほうを優しい顔して笑って見ていた。

聞き間違いじゃ、ない……。

「あ、あたしっ。あたしも……すきっ。ヒロさんが、すき――」

あとは夢中で必死に伝えた。音に掻き消されないように。

あたしの言葉、あたしの気持ち。ちゃんと聞こえた……？

七色の光の中でヒロさんは。鼻にくしゃつと皺を寄せて、笑った。

「あー、よかった。ちゃんと言って。なんも言えないまま逃げられるところだった。ほんと、せっかちだよなあ。おじよ……じゃなかった、葉月ちゃんは」

「に、逃げっ？」

「なーんのために、わざわざこの日に花持って来たと思ってんの」

「だって！ ヒロさんが言ったんじゃない！ “お客さんだからなあ” っって」

「あれは……。すぐ近くまで親方が来てたんだ。仕方なかったんだって」

えっ。知らなかった……。そうだったのか……。

「でも葉月ちゃん、あんどきすげえ泣きそうな顔してさ。次の日からオトモダチの家に行っちゃっただろ？ マジで落ち込んだよ。葉月ちゃん泣かせて、オレなにやってんだろーって」

「ヒロさん……」

「ごめんね、葉月ちゃん」

「ううん、もういい」

「葉月ちゃん、ほんとごめん」

「……“ちゃん”はいらない。なんか子ども扱いされてるみたいでやだ」

実際ヒロさんから見たらあたしは子どもだろうけど。

初めて呼ばれた、あたしの名前。

ずっとそう呼んで欲しかったのに、なんだかくすぐつたい。

それに、さつきからすごい連呼されてる気がするんだけど。気のせい？

「はいはい。じゃあ——葉月」

とすると、手首から先だけが白いあの手が、あたしの両肩に乗せられた。

シンクロするように心臓が激しく鳴る。

背中を向けてて見えないけど、一際大きな爆音が、大きな歓声が、鼓膜を揺らす。目の前のヒロさんの顔までも真っ赤に染めあげた。

あたしを見つめる目の中にも小さな花が咲いていた。

その花がどんどんあたしに近づいて来る。そのまま、目を閉じた。

ヒロさんの唇は、日焼けしてるせいかちょっと乾いてて。温かくて優しかった。そして、夏の匂いがした。

二人で並んで見上げた空にスターマインが上がる。ものすごい光量に、頭の中からつま先まで光で包まれる。

鼓膜にいつまでもじんと残る、心地よい刺激に思わず顔を顰めると、肩を引き寄せられた。

瞼を閉じてても、色鮮やかな映像がいつまでも残ってる。花畑みたいになった、真夏の夜の空。

これは絶対に、咲き終わらない。
庭を彩る花がそうだったように。

空に、咲いた花も――
あたしの胸の中に、いつまでも咲くから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6988w/>

空に、はな咲く

2011年9月17日03時10分発行